海外事務所だより

ロンドン事務所

ロンドンオリンピックで活躍したボランティア

(一財)自治体国際化協会ロンドン事務所所長補佐　桜井　千尋（東京都派遣）
(一財)自治体国際化協会ロンドン事務所所長補佐　大庭　達哉（静岡県派遣）

2014年７月、ロンドンオリンピック・パラリンピック大会（以下、オリンピック）からちょうど２年にあたるこの時期、ロンドンの街角に、今年もまた「Team London」と書かれた鮮やかなピンク色のシャツを着る人々を見かけるようになりました。彼らはロンドン・アンバサダーと呼ばれるロンドンの観光ボランティアであり、2012年のオリンピック開催中にも、ロンドンを訪れた観光客に対してビジター案内をしていました。

2012年にここロンドンで開催されたオリンピックでは、上記のロンドン・アンバサダーをはじめ、市民がさまざまな形でボランティアとして大会をサポートしていました。本稿では、オリンピックの成功に大きく貢献したボランティアについて紹介します。

ロンドンオリンピックを支えたボランティア

オリンピックでは、大きく分けて「大会運営」と「観光」の二つの分野でボランティアが大会をサポートしました。「大会運営」のボランティアは、大会事務局と連携し、選手の支援、会場運営、選手の移動、医療関係など大会の運営に携わり、「観光」のボランティアは主要観光拠点でロンドンに関するビジター・インフォーメーションの提供を役割としていました。

●大会運営ボランティア「ゲームズ・メーカー」

「ゲームズ･メーカー」は、ロンドンオリンピック・パラリンピック組織委員会が運営したボランティアであり、オリンピック開催２年前の2010年に一般に広く募集が行われました。公募には約24万人の応募があり、約１年間かけて７万人を選抜し、大会運営に携わるボランティア「ゲームズ・メーカー」が採用されました。ゲームズ・メーカーという名前には、「ボランティアであるあなたがゲームをつくるメンバー」という意味が込められています。応募資格は、入国管理規制上、英国でボランティアとして働く資格のある18歳以上の人で、英国籍以外や障がいを持った人も応募できました。オリンピックまたはパラリンピックで最低10日間のボランティア活動、もしくは両方に参加したい場合は最低20日間のボランティア活動を行う意思があること、割り当てられた仕事を受け入れること、最低３日間のトレーニングに参加することなどが応募条件とされました。

ゲームズ・メーカーは、80以上の会場・施設において10部門およそ860種類におよぶ役割（例えば、通訳、医療サービス、来場者案内、クライアント送迎、清掃など）を担いました。

また、16～17歳は「ヤング・ゲームズ・メーカー」として別枠公募で２千人が採用され、バレーボールコートのモップがけ、陸上選手の衣類運搬、テニスのボールボーイなどの役割を担いました。

幅広い人々が活躍したゲームズ・メーカー

●観光ボランティア「ロンドン・アンバサダー」

「ロンドン・アンバサダー」は、ロンドン市（Greater London Authority）が運営する観光ボランティアです。ロンドン市は2011年１月に、オリンピックのために訪れた観光客に対して、市内の空港や駅、観光地、競技会場付近で来訪者の案内や情報提供などを行うためのボランティア「ロンドン・アンバサダー（観光大使）」を公募しました。選考のための面接は市内複数のコミュニティーセンターで行われるなど、同プログラムは地元コミュニティーと連携して運営されました。公募には約３万人の応募があり、書類選考と面接を通して最終的に約８千人がロンドン・アンバサダーとして選考されました。選考されたロンドン・アンバサダーには、ｅラーニングによるオンライン研修に加えて、３日間の実地研修が行われました。

オリンピック開催中は、交通の主要拠点を含め、市内全域の主な観光地43か所に観光案内所を設置し、各案内所の需要に応じ、毎シフト４～24人のアンバサダーが配置され、ビジター・インフォーメーションの提供、交通案内、オリンピック開催中に市内で開かれる各種イベントの案内などを行いました。

さらに、ロンドン市だけでなく、サッカーなどの競技会場や主要な空港がある地方都市でも同様に、地元の自治体が中心となってボランティアを採用し、国内外からの来訪者を迎え入れました。各地のボランティアは、ロンドン・アンバサダーのように、「地域名＋アンバサダー」と呼ばれました。

オリンピックで活躍したこれらのボランティア参加者は、オリンピック開会式のリハーサルの観賞に招待されました。また、オリンピック終了後にロンドンで実施された沿道でのパレードでは、英国選手団の後ろをボランティアが歩き、沿道の観衆から選手同様にその活躍を祝福されました。

ボランティアも参加した祝勝パレード

オリンピック・レガシーとしてのボランティア

オリンピック・レガシーとは、オリンピック終了後に開催都市に残され得る社会的、経済的、環境的な利益のことです。例えば、大会のために建設・改修されたスポーツ施設、スポーツ人口の増加・競技力の向上、開催都市の知名度向上などがあります。オリンピックを機に英国内でのボランティアの意識が高まったこともまた、オリンピック・レガシーに該当します。

ロンドン市の調査によると、ロンドン市民の半数以上がオリンピックを契機にボランティアに対する意識が高まり、また市民の42％がオリンピックをきっかけに人生で初めてボランティア活動を行ったという結果が出ています。また、オリンピック開催から１年の間に何かしらのボランティアに携わった数は市民全体の68％以上にのぼり、その内86％がボランティアは自身のワークスキルを高める上でも重要な機会であると回答しています。

このような状況の中、ボランティアへの気運を

オリンピック終了後も継続していくための取り組みが行われています。

ロンドン市は、大会前の2011年にロンドン・アンバサダーをはじめ、さまざまな地域イベントでのボランティア活動を斡旋するボランティア・プログラム「チーム・ロンドン」を開始し、現在も引き続き運営しています。同プログラムの目的は、オリンピック・レガシーとして、オリンピックでボランティアに従事した人々が大会終了後も引き続きボランティア活動ができる機会を提供することです。チーム・ロンドンに登録した人たちに対し、大きなスポーツイベントから学校・地域コミュニティーでのイベントまで各種ボランティアの情報を提供し、またホームページでは簡単にボランティア情報を検索できるようになっています。オリンピック以降もチーム・ロンドンへの登録人数は増え続け、2014年７月時点で約３万4,000人が同プログラムに登録しています。オリンピック中に活躍したロンドン・アンバサダーは、2013年以降も観光客が多い夏季とクリスマスシーズンに期間限定で復活し、観光案内をしています。

トラファルガー広場で観光案内をするロンドン・アンバサダー
（2014年８月）

また、英国全体の取り組みとして、ボランティアの気運をさらに拡大し地域の草の根スポーツに生かすことを目的に、政府や民間企業などからの資金提供のもと慈善団体「Join In Trust」が2012年５月に設立され、「ジョイン・イン（Join In）」事業が始まりました。この事業は、地方自治体やスポーツ関連団体などと協働して、ボランティア活動を推進する各種キャンペーンやイベントを実施するとともに、スポーツクラブのネットワークを活用して、専用のウェブサイトから地域のスポーツイベントなどにおけるボランティア機会を検索できるサービスを提供しています。2013年夏には全国で１万以上のイベントなどが開催され、約10万人が新たにボランティアとして活躍しました。

東京オリンピックをつくりませんか？

ロンドンの街を歩いていると、ロンドン・アンバサダーをはじめ、ふとしたところでボランティアをしている人々を見かけます。何人かに声をかけたところ、多くが2012年のオリンピックで、何らかの形でボランティアに関わった方々でした。その時の経験がとても素晴らしいものであり、ぜひまたボランティアをやりたいという思いから、オリンピック後も引き続き活動を行っているそうです。彼らが嬉しそうに自身の経験を話す姿を見ると、幸せな記憶としてオリンピックがロンドンの人々に残っているのだな、と感じます。

日本でも、56年ぶりとなるオリンピックが2020年に東京で開催されます。東京オリンピックの成功には、数多くのボランティアの力が不可欠であり、さまざまなところでオリンピックに関わるボランティア・プログラムが始まっていく予定です。自国でのオリンピック開催というまれにみるチャンス。多くの方々がボランティアとして選手などと一緒に大会の雰囲気を盛り上げ、ロンドンに負けないくらい素敵なオリンピックになればと願うこの頃です。